舞姬

川端康成選集　第六卷

舞姫

昭和31年3月16日　印刷
昭和31年3月20日　發行

川端康成選集

第六卷

（第三回配本）

舞姫

定價　二六〇圓
地方賣價　二七〇圓

著者　川端康成

發行者・東京都新宿區矢來町七一　佐藤亮一

印刷者・東京都千代田區神田神保町三ノ二三　塚田重

印刷所・塚田印刷株式會社

製本・加藤製本所

＊落丁・亂丁本はおとりかえいたします。

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七二一―八番
振替東京八〇八番

目次

舞姫……五
再婚者……二八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

舞姬

舞姬

皇居の堀

東京の日の入りは四時半ごろ、十一月のなかばである……。
タクシイがいやな音を立ててとまると、うしろから煙をふき出した。
炭の俵とまきの袋とを、うしろにつけた車だ。ゆがんだ古バケツもぶらさげてゐる。
あとの車の警笛に振り向いて、
「こはい。こはいわ。」
と、波子は肩をすくめると、竹原に寄り添つた。
そして、顔をかくさうとするかのやうに、手を胸まであげた。
竹原はその波子の指先がふるへてゐるのにおどろいた。
「なにが……？　なにがこはいんです。」
「見つかるわ。見つかりさうですわ。」
「ああ……。」
さうかと思つて、竹原は波子を見た。
日比谷公園の裏から皇居前の廣場にはいる、交叉點のまんなかで、車のゆききの多い道だ

し、ゆききの多い引け時だから、二人の車のうしろに二三臺とまり、左右を流れる車がつづいた。

うしろにつかへた車がバックすると、その明りが二人の車にさしこんだ。波子の胸の寶石がきらめいた。

波子は黒いスウツの左の胸に、ブロオチをつけてゐた。細長いぶだうの形で、つるは白金、葉は青いくすんだ石、それに幾粒かのダイヤの實があつた。

首飾りに合はせて、眞珠の耳飾りもつけてゐた。

しかし、耳の眞珠は髮の毛に見えかくれするほどだつた。首の眞珠も、白いブラウスのレエスの飾りで、あまり目立たなかつた。レエスは白と思へるが、薄く眞珠色なのかもしれない。

そのレエスの飾りは、胸の下の方まであつたが、やはらかくいいもので、むしろ年齢の氣品を添へてゐた。

さうしておなじレエスのえりが、立てたといふほど高くはなく、耳の下あたりからフリルを取つて、そのひだは前へ來るにつれて、圓みが深まつてゐる。細い首にやさしい波がゆらめいてゐるやうだ。

薄明りのなかで、波子の胸の寶石のきらめきも、竹原に訴へるやうだつた。

「見つかるつて、こんなところで、だれに見つかるんです。」

「矢木にだつて……。それから、高男にだつて……。高男はお父さん子ですから、私を見張つてますのよ。」
「御主人は京都ぢやありませんか。」
「わかりませんわ。それに、いつ歸るかしれないわ。」
と、波子は首を振つて、
「竹原さんがこんな車に乘せるからよ。竹原さんは昔から、こんなことばかりなさつてるのよ。」
しかし、車はいやな音をひきずつて動き出した。

「ああ、動いた。」
と、波子はつぶやいた。
交叉點の眞中で煙を吐いた車を、交通巡査も見てゐたが、とがめには來なかつたから、とまつてゐたのは、ほんの短い時間だつたらう。
波子は恐怖がほほに殘つてゐるかのやうに、左手をほほにあてた。
「こんな車に乘せたつて、しかられたが……。」
と、竹原は言つた。
「人をかきわけて逃げるやうに、公會堂を出て、波子さんが、そはそはしてるからですよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「さう？　自分では氣がつかなかつたけれど、さうかもしれませんわ。」
波子はうつ向いた。
「今日だつて、うちを出るときに、ふつと指輪を二つはめてみたりするんですの。」
「指輪？」
「さう。主人の財産ですから……。もし主人に出會つたら、寶石がまだある、自分の留守になくならなかつたと思つて、矢木はよろこび……。」
と、波子が言ふ時に、また車はいやな音をさせてとまつた。
こんどは運轉手がおりて行つた。
竹原は波子の指輪を見ながら、
「矢木さんに見つかつた時の用心に、寶石をつけてらしたんですか。」
「さう、はつきりぢやなく……、ただふつと。」
「おどろいたもんだ。」
しかし、波子は竹原の聲も聞えぬかのやうに、
「いやですわ、この車……。惡いことがあるわ。こはいわ。」
「ひどい煙を出してますね。」
と、竹原はうしろの窓を見て、
「かまのふたをあけて、火をおこすらしい。」

「地獄の車ですわ。おりて歩いてはいけませんの？」
「とにかく出ませうか。」
竹原はあけにくいとびらをあけた。
皇居前の廣場へ渡る、堀の上であつた。
竹原は運轉手のところに行つて、波子を振り向いた。
「お歸り、いそぎますか。」
「いいえ、よろしいんですの。」
運轉手は長い古鐵の棒を、かまの腹につつこんで、がちやがちやまはしてゐた。火を扇ぐものだらう。
波子は人目をさけるやうに、堀の水を見おろしてゐたが、竹原が近づくと、
「今夜はうちに品子がひとりだと思ひますの。あの子は、私の歸りがおそいと、どうしてた、どこへ行つて來たと聞いて、少し涙ぐみさうになつたりしますけれど、心配して言ふだけで、高男のやうに、私を見張つてるわけぢやありませんわ。」
「さうですか。しかし、今の寶石のお話ね、おどろきましたね。寶石はもとからあなたのものだし、やはりこれまで通りに、おうちの暮しのことは、一切あなたの力でやつて來てるんでせう。」
「さうですわ。力はありませんけれど……。」

「あきれた話だ。」
と、竹原は波子の力ない姿をながめて、
「ぼくには、御主人の氣持が不可解ですよ。」
「矢木家の家風ですわ。結婚した時から、一日も變らない、習はしですもの。竹原さんも、昔からよく、ごぞんじぢやありませんか。」
波子は言ひつづけた。
「結婚前からかもしれませんよ。主人の母の代からの……。母は矢木の父に早く死に別れて、女手ひとつで、矢木を學校へあげて來たんですから。」
「それとは、わけがちがひますよ。また、あなたの、いはば持參金で、樂に暮してゐられた戰爭前とは、わけがちがふでせう。矢木さんにも、わかり過ぎてるはずだ。」
「わかつてますわ。でも、人間はそれぞれ悲しみを、背負つてゐますからね。矢木がさういふんですの。悲しみがあまり重いと、そのほかのことでは、知つてゐてわからないこと、どうしやうもないことも、出來て來ますわ。それは私もおたがひに、さうだと思ひますの。」
「ばからしい。矢木さんの悲しみは、なんだか知らんが……。」
「日本が敗けて、矢木の心の美がほろんだと、いふんですの。自分は古い日本の亡靈だ……。」
「ふうん。その亡靈の世迷言で、波子さんの所帶の苦勞を、見て見ぬ振りしようといふ……

……？」

「見ぬ振りどころぢやありませんの。物の減つてゆくのが、矢木は不安でしかたがないの。ですから、私のやり方を監視してゐるのよ。こまかいお金に、いちいち苦情を言ふのよ。なにもなくなつた時に、矢木は自殺するつもりぢやないかと思つて、私はこはいんですの。」

竹原も少し寒けがした。

「それで、指輪を二つ、はめて出られたわけですか……。矢木さんは亡靈どころぢやないでせうが、沚子さんはなにか亡靈につかれてゐるかもしれませんね。しかし、お父さんの卑怯な態度を、お父さん子の高男さんは、どう見ていらつしやるんですか。もう子供ぢやないでせう。」

「ええ。惱んでゐるやうですわ。その點では、私に同情してますの。私の働いてゐるのを見て、學校をやめて働くつて言ひますけれど、あの子は、父を學者として、絶對に敬ひ通して來た子ですから、もし父を疑ひ出すと、どうなりますか、おそろしいですわ。でも、こんな話、こんなところで、もう……。」

「さう。いづれ落ちついて聞きませう。しかし、あなたが今のやうに、矢木さんをこはがるのは、見るにしのびないな。」

「すみません、もういいの。ときどき、恐怖の發作が起きるんですわ。てんかんか、ヒステリイみたい……。」

「さうですか？」
竹原は疑はしげに言つた。
「ほんたう。車のとまつたのが、いけないのよ。もうなんともありません。」
と、波子は顔をあげて、
「きれいな夕やけですわ。」
その空の色は、首飾りの眞珠にも、うつるやうであつた。

午前は晴れて、午後は薄雲の出る日が、二三日つづいてゐた。
ほんとに薄い雲で、入日の西空は、雲が夕もやに溶けこんでゐた。しかし、もやの夕やけに微妙な色合ひのあるのは、雲のせゐらしかつた。
夕やけ空は煙るやうに垂れて、晝間の溫かさを、ぽうつと甘くつつんでゐたが、そのなかにもう秋の夜冷えが、すうつと通りはじめてゐた。夕やけのあかね色も、ちやうどそんな感じだつた。
あかね色の空は、濃く朱がかつたところもあり、薄く紅がかつたところもあり、それに薄紫や薄あゐ色のところも、少しあつた。もつとほかの色もあつて、夕もやのなかに溶けあひ、じつと垂れてゐるやうに見えながら、色は早く移つてゆき、消えてゆきさうであつた。
そして、皇居の森の木末に、一筋のリボンのやうに、青い空が細く殘つてゐた。

その青い空には、夕やけの色がみぢんもうつつてゐない。黒く沈んだ森と赤くよどんだ夕やけとのあひだに、あざやかな切れ目を描いて、その細い青空は遠くに見え、靜かに澄んで、かなしいやうであつた。

「きれいな夕やけですね。」

と、竹原も言つたが、波子の言葉をくりかへしたに過ぎない。

竹原は波子が氣がかりで、夕やけはこんなものだと思つただけだ。

波子は空を見つづけてゐた。

「これから冬にかけて、夕やけが多いですわ。子供のころを思ひ出すやうな、夕やけぢやありませんの?」

「さう……。」

「冬の寒いのに、表で夕やけを見てゐて、かぜをひくからつて、しかられたものですわ。あゝ……、私ね、夕やけをじつと見てゐたりするのも、矢木の感化かしらと、思ふことがありますけれど、子供の時から、さうでしたのね。」

と、波子は竹原を振り向いて、

「でも、やはり、妙なところがあるわ。さつき、日比谷の公會堂へはいる前にも、いてふの木が四五本、公園の出口にも、いてふが四五本ありましたでせう。同じくらゐの木がならんで立つてゐながら、黄ばみ加減が木によつてちがひますし、葉の多く落ちたのや、少く落ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong